

Anne Frank の入眠幻覚 (その1)

— Anne Frank と「親友 Hanneli Goslar が出てくる幻視」—

名島潤慈・山根 望*

Analysis of an Anne Frank's Hypnagogic Hallucination in Which Her Close Friend Hanneli Goslar Appears (1) : Anne Frank and Hanneli Goslar

Junji NAJIMA and Nozomi YAMANE

(Received September 30, 2005)

The Diary of a Young Girl written by Anne Frank (June 12, 1929-February/March 1945) in the “Secret Annex” of an old office building in Amsterdam is a truly remarkable book. In her diary, on Saturday, November 27, 1943, she wrote : “Yesterday evening, before I fell asleep, who should suddenly appear before my eyes but Lies! I saw her in front of me, clothed in rags, her face thin and worn. Her eyes were very big and she looked so sadly and reproachfully at me that I could read in her eyes, ‘Oh, Anne, why have you deserted me?’” (quoted from Anne Frank : *The diary of a young girl*, translated from the Dutch by B. M. Mooyaart, 1967, Doubleday, p.119) “Lies” is Hanna Pick-Goslar whom Anne affectionately called as “Hanneli”. In order to examine the meaning of Anne’s hypnagogic hallucination in *Analysis of an Anne Frank’s Hypnagogic Hallucination in Which her Close Friend Hanneli Goslar Appears* (2), the paper describes Anne Frank’s life history, her personality, and the relationship between Anne Frank and Hanneli Goslar.

Key words : Anne Frank, dreamer-centered dream analysis, hypnagogic hallucination

I 本稿のねらい

ドイツの宗教改革者の Martin Luther (マルチン・ルター) (1483-1546) は晩年になると極度の反ユダヤ主義者となった。1543年の「ユダヤ人と彼らの虚偽について」という論文のなかで Luther は、①ユダヤ人の強制収容、②シナゴーク (ユダヤ教の礼拝堂) の焼き払い、③ラビ (ユダヤ教の教父) による教育の禁止とタルムード (ユダヤ教の経典) の没収などを提案した。石田 (1980) が指摘しているように、Luther のこのような提案は400年後にオーストリア生まれの Adolf Hitler (1889-1945) によって現実化されることになる。Hitler とナチによって殺害されたヨーロッパのユダヤ人の総数は約600万人とされている。Hitler は非ユダヤ系であり、かつ近親相姦の落とし子であった (大澤, 1995)。30歳から政治活動を開始したが、

* 山口大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専修

56歳で自殺するまで彼は一貫してユダヤ人の排除・絶滅を目指していた。

ところで、筆者の一人（名島）は以前アメリカに留学していたとき、臨床心理士の Graham Kavanagh による連続10回の「精神分析的心理療法における夢の利用についてのセミナー」が開催されたので、それに参加してみた。場所は、マンハッタンの下町の高層ビル内にある彼のオフィス（心理療法室）であった。そのセミナーは、毎回受講者たち（臨床心理士・精神科医・社会福祉士）に受講者が受け持っているクライアントの夢を報告させ、その夢の意味について皆で討論するというものであった。そうしたなかである一人の女性社会福祉士が、「空襲があり、学校も家もみんな大火事になって焼けてしまう」というある女性クライアントの悪夢を報告した。皆であれこれ討議したが、結局その夢は、「ホロコースト・サバイバー」(Holocaust survivor)（ナチによるユダヤ人大虐殺を生き延びた人）の見た頻回夢であった。第二次世界大戦が終了して40年以上も経っているのに未だにこのような心的外傷夢にうなされる人がいるということに筆者は何とも言えない気持ちであった。

ところで、第二次世界大戦後、『夜と霧』(Frankl, 1947; 原題は『一心理学者の強制収容所体験』)、『夜』(Wiesel, 1958)、『アウシュヴィッツの地獄に生きて』(Newman, 1963) といったホロコースト関連作品が相次いで出版された。そのなかには、ドイツ系ユダヤ人の Annelies Marie Frank (1929. 6. 12.-1945. 2/3.)、通称 Anne Frank が書き残した『アンネの日記』もある。1942年6月12日から1944年8月1日まで、Anne の13歳から15歳までの日記である。この『アンネの日記』は、後の「ホロコースト女性文学」(Women's Holocaust Literature) の先駆けとなるものであった。

1947年に Anne の父親の Otto Heinrich Frank (1889. 5. 12.-1980. 8. 19.) が児童文学書としてアンネが書き残した日記を編集・出版したことで『アンネの日記』は一躍子どもたちの愛読書となった。戦後60年経った今でも『アンネの日記』は世界各地で読まれている。その理由として、オランダのアムステルダム の隠れ家での2年間に及ぶ厳しい生活のなかでさえも、Anne が日記のなかで思春期の少女特有の葛藤や喜びを素直に伸び伸びと表現していることが挙げられるだろう。Anne がこのように日記を通して自己表現できたことは、強制収容所に送られた他のユダヤ人とは異なり、彼女が潜伏する場所・協力者・食料に大変恵まれた環境にあったからである。とはいえ、2年間も決して外に出ることが許されず、いつナチがやってくるかわからないという緊張状態は、思春期の少女の心に多大な影響を及ぼしたであろう。もっとも、日記のほとんどは母親への批判や一緒に潜伏していた van Pels 一家（日記ではファン・ダーン一家）や Fritz Pfeffer（日記ではアルベルト・デュッセル）とのいざこざ、隠れ家に潜伏していることを発見されるのではないかという不安、そして日記の後半部分からは Pels 夫妻の長男の Peter van Pels との微妙な関係（恋心）についての記述が大半を占め、Anne が自分の影の部分の直接日記に書いている箇所はあまりない。

『アンネの日記』は潜伏生活においても未来に希望を抱いている少女の姿に溢れている。しかし、生活面での支援者であった Miep Gies（ミープ・ヒース）(1909年のウィーン生まれ。13歳からアムステルダムで生活) は、「Anne はますますひとりであることが多くなり、ひきこもって日記を書いているか、屋根裏部屋にあがって、陰気な顔でひとりぼつねんとしているかしていた」(Lee, 1999) と回想している。このように、第三者から見ると Anne の精神状態はひどく悪かった。しかし、日記にはそのような心の影を直接書いたものはほとんどない。

自分の影が日記に直接記されていないとすれば、それは夢や入眠幻覚のなかに隠喩の形で入り込んでいるのかもしれない。本論文では彼女が日記に書き留めた幻視から、潜伏生活を送っ

ていたさいの Anne の心理状態を吟味してみたい。方法論的には、Anne の心理状態を理解するために「夢主中心的夢分析 (dreamer-centered dream analysis)」(名島, 1999a, 2003) を行いたい。夢主中心的夢分析とは、夢分析家の側の主観的・理論的な意味づけや解釈を極力排して、可能なかぎり夢主自身の内的枠組みに沿って夢の意味を理解しようとするものである。われわれはこのような問題意識の上に立って、これまで善導・藤原道綱母・菅原孝標女・源信などの夢の意味を吟味してきた (名島, 1999b, 2003, 2004, 2005)。

ただし、本論文で取り上げるのは Anne の見た「夢」(睡眠中の夢)ではなくて、Anne の友人の Hanneli Goslar (ハンネリ・ホスラール) (1928. 11.-) についての「幻視」(visual hallucination) である。Anne 自身、1943年11月27日の日記のなかで、「きのうの夜、眠りに落ちる直前、ふいにわたしの目の前にあらわれた人影、だれだと思いますか？ ほかでもないハンネリなんです」と書いている (Frank & Pressler eds., 2001)。眠りに落ちる直前なので、これはいわゆる「入眠幻覚」(hypnagogic hallucination) である。入眠幻覚は入眠時幻覚とも言うが、覚醒と睡眠の中間の段階で起こる幻覚である (入眠幻覚の反対が出眠幻覚 hypnopompic hallucination である)。分かりやすく言えば、脳の覚醒水準が低下してうとうとした眠りかけの、ごく短い時間内に体験される現象で、覚醒感や現実感を伴っている。幾何学的な模様や光が見えたり、情景や静物や人の顔が見えたりする (幻視)。騒音・音楽・人の声が聞こえることもあるし (幻聴)、体が浮いたり落下したり引っ張られたりするような感覚を味わったりすることもある (運動幻覚)。怪物や悪魔のようなものが襲ってきたり、体が落下していくような体験をするときには強い恐怖感を伴っていることが多い。

Anne は後の、1944年1月6日の日記のなかで、「不思議なのは、なぜか夢のなかにかぎって、たびたびこういう鮮明なイメージに出会うということです。最初はお祖母ちやま (原注：父方祖母) でした。とても明晰なイメージでしたから、お祖母ちやまのふっくらした、やわらかな、皺の寄ったピロードのような肌の感じさえ見分けられるほどでした。つづいて、守護天使のようにあらわれたのが、お祖母ちゃん (原注：母方祖母)。さらにそのつぎがハンネリ」と書いている。この書き方からすれば、Anne 自身は Hanneli の姿を夢のなかで見たものとみなしているようである。Random House Academic Resources (2004) も、「アンネはよくユダヤ人の友だちのことを心配していた。1943年11月27日には友だちのハンネリ・ホスラールについての夢を記述している」と述べている。しかし、1943年11月27日の日記にははっきりと「眠りに落ちる直前」と書かれているので、入眠幻覚であることは否定できない。

後で詳しく紹介するが、Anne の場合親友の Hanneli は一言もしゃべっていないので、これは入眠時の幻覚のなかでも幻視にあたる。したがって本論文では、夢主中心的夢分析の考え方を Anne の見た幻視に適用することになる。この Anne の幻視の分析に際しては、① Anne 自身の書いた『アンネの日記』、② Anne についての信頼できる伝記、③ Hanneli 自身の回想といったものを中心的資料とする。

ここで①の『アンネの日記』について少し触れておくと、隠れ家で潜伏生活を送った8人のうち、収容所から無事に生還できたのは父の Otto だけであった。1945年6月3日にアムステルダムに帰った Otto は娘2人の生還を信じて2人を待ちつづけていたが、1945年7月、ベルゲン＝ベルゼン収容所で2人と一緒だったという看護婦からの手紙で、愛娘たちの悲惨な最期を知った (Gies & Gold, 1988)。ロッテルダム在住のその看護婦は、Margot と Anne がベルゲン＝ベルゼン強制収容所の第19療養棟において2月末か3月初めに死亡したと手紙に書いていた。悲嘆にくれる Otto を目にした Miep Gies は、それまで彼女の机の引き出しのなかに隠

していた Anne の遺品を Otto に手渡した。それらは、Anne の日記帳と数冊のノート、それに、ばらの薄い用紙 327 枚などであった (Müller, 1998)。Otto は最初は躊躇したものの日記の出版を Anne の遺志であると考え、1947年6月25日、オランダ語の『隠れ家』(Het Achterhuis) (ヘット・アハテル・ホイス) をコンタクト社から出版した。『隠れ家』という書名は、潜伏生活を送っている場所を Anne 自身が「ヘット・アハテル・ホイス」(直訳すれば、後ろの家)と呼んでいたからである。『アンネの日記 増補新訂版』(Frank & Pressler eds, 2001; 深町訳, 2003) の1944年5月11日には、「わたしの最大の望みは、将来ジャーナリストになり、やがては著名な作家になることです。(中略) いずれにせよ、戦争が終わったら、とりあえず『隠れ家』という題の本を書きたいとは思っています。うまく書けるかどうかはわかりませんが、この日記がそのための大きな助けにはなってくれるでしょう」とある。この本はその後、ドイツ語版、イギリス版、アメリカ版、日本語版が相次いで出版され、一躍ベストセラーとなった。

もともと Anne は自分宛てに日記を書いていたが、1944年3月29日に Anne はオランダ亡命政府の教育芸術科学相の Bolkestein (ボルケステイン) がドイツ占領下におけるオランダ国民の苦しい生活を戦後公開するために手記や手紙を集めるべきだというロンドンからのラジオ放送を聞いた。そこで Anne はそれまでの日記を清書し、大幅に削除・加筆した。それは「b テキスト」と呼ばれている。それと同時に最初の日記、いわゆる「a テキスト」もそのまま書きつづけた。最初に出版された『隠れ家』は、父親の Otto が「a テキスト」と「b テキスト」から抜粋し、また児童書ということや出版後の影響を配慮して、個人名や性に関する記述を大幅に削除したものだ。しかし、1986年には、オランダ国立戦時記録研究所が Anne の自筆原稿を忠実に再現した学術資料版『アンネ・フランクの日記』を出版した。そして、1991年には『アンネの日記 完全版』(Frank & Pressler eds., 1991) が出版された。これは Otto が保存していた他の記録も加え、また a テキストと b テキスト両方からの文章も補充されたものである。したがって、従来の版よりも30%ほど内容が増えている。その後さらに、1998年にそれまで知られていなかった5ページ分の日記の存在が明らかとなり、それを加えた『アンネの日記 増補新訂版』(Frank & Pressler eds, 2001; 深町訳, 2003) が出版された。本論文ではもっぱらこの『アンネの日記 増補新訂版』を用いる。また、紙数の都合上、本論文では Anne の生活史や性格、Anne が見た Hanneli の幻視の内容などについて整理・記述し、Hanneli の幻視の意味についての考察は「Anne Frank の入眠幻覚 (その2)」で行いたい。

II Anne Frank の紹介

1. 生活史

Anne は1929年6月12日、ユダヤ人の Otto Heinrich Frank (当時40歳) とユダヤ人の Edith Frank-Holländer (当時29歳) (1900. 1. 16.-1945. 1. 6.) の次女として、ドイツのフランクフルトで生を受けた。真面目で大人しい3歳年上の姉の Margot Betti Frank (1926. 2. 16.-1945. 3.) とは異なり、Anne は幼少期から活発明朗で、思ったことはすぐに口にするような少女であった。

Anne の父親の Otto は自由派ユダヤ教に属し、Frank 家の次男として家業の銀行業を営んでいた。一方、母親の Edith は改革派ユダヤ教徒だったので Otto よりも信心深く、裕福な家庭出身の上品な人であった。Müller (1998) によれば、Otto 自身はユダヤ教との濃いつながりはなく、ヘブライ語も解さなかったし、ユダヤ教徒なら13歳の誕生日のときに行う成人式「バル・ミツバ」(Bar Mitzvah) の儀式も受けていなかったという (バル・ミツバとは、「ユ

ダヤ教の宗教上の義務を負う人」、つまり成人男子を意味する)。

1933年1月30日、Adolf Hitler がドイツ首相に任命された。そして、1933年3月22日にダッハウに最初の強制収容所が設置され、翌日ドイツ議会で全権委任法が可決された。ナチスによるユダヤ人迫害を危惧した Otto は、経営していた銀行が不況で経営が悪化したこともあり、1933年7月にオランダのアムステルダムに移住した。アムステルダムで Otto は、オペクタ商會を設立した。Müller (1998) によると、Otto は1933年9月15日に「果実産品、なかんずくペクチンの製造および販売」を目的とするオランダ・オペクタ商會をオランダ商工會議所の商業登記簿に登録している (ペクチンとはジャム製造用のゲル化剤のこと)。その間、母子は Otto の実家に身を寄せ、1933年9月に母 Edith が、同年12月に姉 Margot が、ついで1934年2月に Anne がアムステルダムに移住した。Otto はその後1938年10月以来、オペクタ商會の他に、各種ソーセージの製造に必要なスパイスを販売する有限会社ペクタコン商會も経営するようになった。

ところで Anne はアムステルダムでの生活にすぐに慣れ、5月からモンテッソーリスクールの幼稚園に入園した (モンテッソーリスクールとは、イタリアの女性医師の Maria Montessori (1870-1952) が提唱した教育理論に基づく学校である)。そして、入園した初日に、Hanneli というドイツ生まれのユダヤ人少女と仲良くなり、2人は親友となった。それから Anne はモンテッソーリスクールの小学部に入學し、自由な校風のなかでのびのびと成長した。モンテッソーリスクール時代も Anne はその快活さで多くの友だちに恵まれ、彼女の早熟さは友だちを驚かせた。

1940年、Anne が11歳の時、彼女は14歳のペーテル・スヒフに恋をしたが、ペーテルが周囲の冷やかしから Anne を避けはじめ、Anne の初恋は自然消滅した。その後 Anne にはボーイフレンドが数人できた。

友人やボーイフレンドに恵まれた Anne の充実した学校生活はしかし、1940年5月10日の早朝、ドイツ軍がオランダに侵攻して一変した (ドイツ軍は既に前年の1939年9月1日にポーランドに侵攻していた)。オランダ政府は1940年5月15日に降伏文書に調印した。当然のことながらナチ占領下のオランダにも反ユダヤ主義の波が押し寄せ、オランダで暮らしていた16万人のユダヤ人に対する迫害が相次いで起こるようになった。

1941年1月に公布された条例によって、オランダ国内の全ユダヤ人は住民登録をすることになった。Müller (1998) によれば、ユダヤ人は140,552人、二分の一ユダヤ人は14,549人、四分の一ユダヤ人は5,719人、合計160,820人であった。

1941年10月、Anne と Margot は他のユダヤ人の生徒たちと一緒に、モンテッソーリスクールからユダヤ人中学校へと強制的に転校させられた (市立の木工センターだった建物が急遽ユダヤ人専用の中学校に改変された)。1942年4月には、オランダでもユダヤ人は皆胸に「ダビデの星」(a star of David) をつけなければならなくなった。ダビデの星とは大人の手のひら大の黄色い星型のバッジで、表面にオランダ語の Jood、つまり「ユダヤ人」という文字が刷り込まれているものである。

1942年7月5日、姉の Margot に対してユダヤ移民センターから「ドイツでの勤労奉仕呼び出し状」が届き、それを契機として、Frank 一家は翌日、それまで住んでいたアパートを引き払ってプリンセン運河通り263番地にある Otto の会社の事務所の奥にある屋根裏とその下の2つの階に潜伏することにした。潜伏生活を共にしたのは、① Frank 一家の4人、② van Pels 一家の3人、③ 歯科医の Fritz Pfeffer の合計8人であった。しかし彼らは1944年8月4

日にゲシュタポと「緑衣の警察」(治安警察)に逮捕され、これによって2年1か月に及ぶ潜伏生活は終わりを告げた。Frank一家たちのことを誰が密告したのかはいまだに特定されていない。

ところで、ゲシュタポと緑衣の警察に逮捕された8人は4日間アムステルダム市内の拘置所に留置された後、オランダの北東部のリューネブルク荒地にあったヴェステルボルク中継収容所(Westerbork transit camp)に収容され、1944年9月3日には最終列車でポーランドの「アウシュビッツ強制収容所」(Auschwitz concentration camp)へと移送された。そして、9月6日にアウシュビッツ(ポーランド名はオシフィエンチム)に到着し、その後、アウシュビッツ第1収容所に収容されたHermann van Pelsはガス室で殺された。Anne、Margot、Edithの3人はアウシュビッツ第2収容所、つまりビルケナウ収容所に収容された。ビルケナウ収容所はアウシュビッツ第1収容所から3キロばかり離れたブジェジンカ村に建設されていた。3人は力を合わせてビルケナウ収容所での生活を乗り越えようとした。しかしそこでの環境条件は劣悪で、シラミ・ダニ・ナンキンムシなどが労働に疲れ果てた被収容者の体に食いつき、ひどい痒み・炎症・膿瘍などを引き起こした。Anne自身も到着して2、3週間後には全身が潰瘍と斑点に覆われ、いわゆる疥癬ブロックに移されたという(Müller, 1998)。

1944年10月28日、AnneとMargotは「選別」され、衛生状態が極めて悪かった「ベルゲン＝ベルゼン強制収容所」(Bergen-Belsen concentration camp)に移された。このベルゲン＝ベルゼン強制収容所は北西ドイツのハノーヴァーの近くに建設された強制労働用の収容所である。1940年に建設された当初はフランス人やベルギー人の戦争捕虜の収容所であったが、1943年にユダヤ人の強制収容所となった。ベルゲン＝ベルゼン強制収容所はいわゆる絶滅収容所(extermination camp)ではなかったのでガス室はなかった。しかし、粗末なバラックのなかにぎっしりと詰め込まれた被収容者たちは、①強制労働による過労、②栄養不足、③サディスティックな医学的実験、④暴行、⑤寒さ(凍死)、⑥伝染病(赤痢・チフスなど)で次から次へと死亡していった。霜山(1961)の解説によれば、極度の食糧不足のために死体の肉を食べることさえ行われたという。かつてベルゲン＝ベルゼン強制収容所でAnneと一緒にいたというArie Selinger(アリー・セリンジャー)(現在、日本の女子バレーボールチーム東北パイオニアの監督)によれば、そこで与えられた食べ物は1日に一切れのパンと水のようなスープのみであったという(2005.7.16.朝日新聞朝刊)。

ところで、娘たちに去られた後の母Edithは翌年1月にアウシュビッツのビルケナウ収容所で死亡した。一方、ベルゲン＝ベルゼン収容所に移送されたAnneたちの体調はますます悪化していった。そして、ベルゲン＝ベルゼン収容所でチフスが流行し、2月末か3月初めに姉のMargotがチフスで死亡すると、その後を追うようにして数日後にAnneもチフスで死亡した。Anneが死亡した正確な日時は未だに分かっていない。ウェブサイトのWikipedia(2005)のAnne Frankの項によれば、1945年3月に蔓延したチフスによって推定17,000人の被収容者が死亡したという。そのなかにAnneがいたのだろうか。なお、Anneがこのベルゲン＝ベルゼン強制収容所において日記ないしメモをつけていた可能性はあるが、その証拠はない。ベルゲン＝ベルゼン収容所とは一言で言えば被収容者たちが不潔きわまりない動物レベルの生活を強いられた飢餓地獄といった所だったので、おそらく日記やメモをつけるだけの余裕はまったくなかったものと思われる。しかもAnneは両親が既に死亡したと信じていたので(Wikipedia, 2005)、絶望感に打ちひしがれて無気力になっていたであろう。(これは推測になるが、父親のOttoが生きていることをもしもAnneが知ったとすれば、それはAnneにもう少し生きる力

を与えたかもしれない。)

Anne が死亡して数週間後の1945年4月15日、ベルゲン＝ベルゼン収容所はイギリス軍によって解放された。Berenbaum (1993) によれば、解放時には地上にそのまま放置されていた何千もの死体が腐敗し、生き残っていた60,000人の被収容者もそのほとんどが瀕死の状態であった。そして、解放後の数日以内に14,000人が死亡し、数週間のうちにさらに14,000人が死亡したという。ベルリンの Hitler がピストル自殺したのは4月30日であった。余談ながら、アウシュビッツでの体験を1947年に『一心理学者の強制収容所体験』(邦訳名は『夜と霧』)として出版した Viktor E. Frankl (1905-1997) はロゴセラピー(実存分析)の提唱者としてよく知られている。彼の90歳のときの回想録によると、彼の最初の妻はこのベルゲン＝ベルゼン収容所で死去したという。しかも、収容所がイギリス軍によって解放された後の6週間以内での死であったという (Frankl, 1995)。

2. Anne Frank の性格

Anne は非常に好奇心が強く、大人たちを質問攻めにするような快活な少女であった (Gies & Gold, 1988)。また、演劇が好きで、物真似がうまく、早くから詩や童話を作り、特にハリウッドの映画スターに憧れた (Gies & Gold, 1988; Müller, 1998)。母の Edith は知人に送った手紙のなかで、「アンネはマルゴーほどお行儀よくありませんし、それに、ひとつのことに集中するのも得意じゃありません」(Lee, 2000)と書き記している。Anne は家族のなかではおしゃべりで落ち着きのない娘として見られていたようである。しかし、明るく笑顔の絶えない Anne は父の Otto に溺愛され、周囲からも非常に可愛がられた。ちなみに、姉の Margot は母親っ子であったが、Anne のほうは父親っ子であった。幼稚園からの親友 Hanneli は、「Anne はちょっとばかり甘やかされていました。とりわけ、お父さんに、です」(Lee, 1999)と回想している。Otto 自身も後に、「私がマルゴーよりアンネのほうとウマがあったのは本当です。マルゴーはマルゴーで母親のほうに愛着を持っていました。そうなったのはことによると、マルゴーはめったに自分の感情を表に表さないし、アンネのように気まぐれでもなかったので、あまり支えを必要としていなかったからかもしれません」と語っている (Müller, 1998)。

母親に対しては Anne は批判的で、「ママに対しては日ごとに軽蔑の念が深まる」「ママとはあらゆる点で正反対です」などと日記に記している。Anne はまた、自分の両親の関係、つまり夫婦関係についても批判的な目を注いでいる。例えば、1944年2月8日の日記には、「おとうさんはおかあさんを尊重し愛してはいますが、でもその愛はおとうさんが結婚に対して思い描いていたものとはちがうのです」「おとうさんがおかあさんに向ける目は、からかうようであったり、ひやかすようであったりしますが、けっして愛情がこもっているとは言えません」「そのうちいつかはおとうさんも、否応なく気づかされることになるでしょう—おかあさんが、うわべではけっしておとうさんの全面的な愛情を要求することなどなくても、そのじつ内心では徐々に、しかし確実に、ぼろぼろになってゆきつつあることに。おかあさんは、ほかのだれよりも深くお父さんを愛しています。そしてこの種の愛情が報いられないのを見せつけられるのって、とてもむごいことだと思います」などとある。

Anne は、数学はあまり得意でなく作文が大好きで、将来は作家かジャーナリストになりたかった。潜伏生活のなかでも、支援者の Miep Gies が図書館で借りてきた『ギリシャ神話』やドイツの詩人ケルナーが書いた戯曲などたくさんの文学作品を読んでいた。友人のエーファは、「11か12のあの年ごろには珍しく、アンネがおしゃれで虚栄心が強いということ、このことは

とうに気づいていました。わたしなんか身なりにはぜんぜん構わないのに、彼女は着るものに異常に関心がありましたから」(Lee, 1999) と述べて、早熟であった Anne のことを回想している。

実際、Anne の早熟さは、『アンネの日記』の「完全版」によく表れている。父親の Otto が大幅に修正した「縮約版」とは違って、「完全版」には性に対する記述がたびたび見られる。例えば、1942年11月2日の日記にはもうすぐ初潮を迎える彼女自身の体について、そして1944年3月18日の日記にはセックスのことについて書かれている。性に関する記述には、思春期を迎えた女性としてのとまどいや喜びがよく表れている。

Ⅲ Anne の親友 Hanneli Goslar の幻視

1. Hanneli の幻視

『アンネの日記』には合計6つの夢と1つの幻視が出てくる。

まず夢から述べると、①1944年1月6日の日記には、最初のボーイフレンドであったペーテル・スヒフと一緒にメアリー・ボスの絵本を読んでいるとき、Anne の頬にペーテル・スヒフの頬が寄せられるという夢が書かれている。この夢について Anne は「やわらかな、なにかとても、ああ、ひんやりした感じの頬が触れてきたんです。その感触は、なんてすてきで、なんと心地よい……………」と述べ、さらに夢の感想として、「彼を失ってしまったのがとても悲しく思えてなりませんでした。でも、それと同時に、うれしくもあったのは、ペーテルこそいまなおわたしのただひとりのひと、選ばれるひとだということが、この夢ではつきりしたことでした」と述べている。この夢は1月6日の早朝に見られたものである。Anne はまたこの日の日記のなかで、いつ見たのかは不明であるが、②父方祖母の鮮明なイメージの夢や、③母方祖母の鮮明なイメージの夢を見たとも書いている。ただし、夢についての詳細な記述はない。「守護天使のようにあらわれたのが、お祖母ちゃん(原注:母方祖母)」と書かれているので、Anne にとって母方祖母は心の保護者のようなものであったかと思われる。④1944年1月19日の日記には、「ゆうべまたペーテルの夢を見て、今度も彼のさぐるような目を感じましたが、夢そのものは、この前のときほどきれいでも、鮮明でもありませんでした」と書かれている。⑤1944年3月8日の日記には、一昨日の晩の夢として、ともに潜伏生活を送っている Peter van Pels が Anne にキスするという夢が記されている。⑥同じく1944年3月8日の日記には、夕べの夢として、Peter van Pels と Anne がキスするという夢が記されている。ちなみに、Anne の日記によれば、Peter van Pels は1944年4月16日に実際に Anne にキスしたという。

ところで、Anne が最も詳細に記述しているのは、親友 Hanneli が出てくる幻視である。これは時間的には上述の6つの夢よりも前で、1943年11月27日の日記に書かれている。

もともとドイツ軍がオランダに侵攻する前にはアムステルダムにはユダヤ人が16万人住んでいた。1942年8月6日にアムステルダム在住のユダヤ人2,000人が逮捕されてアウシュビッツに送られてから、1943年9月29日までにアムステルダムに住んでいたユダヤ人のほとんどがアウシュビッツに送られた。アムステルダムのユダヤ人は、Frank 一家のようにどこかに潜伏している人たちで、非常に少数であった。しかもこの10月以降から、ナチスは一斉検挙から潜伏しているユダヤ人を密告によって洗いざらい見つける方向へと転換した。つまり、この幻視が見られた時期は、ナチスの矛先がいよいよ隠れ家に向けられ始めた時期と重なっていた。

以下、Anne の見た幻視の内容を深町真理子の訳(2003)でそのまま掲げる。

1943年11月27日 土曜日

親愛なるキティーへ、

きのうの夜、眠りに落ちる直前、ふいにわたしの目の前にあらわれた人影、だれだと思えますか？ ほかでもないハンネリなんです。

わたしの前に立った彼女は、ぼろぼろの服を着て、痩せこけた、やつれた顔をしていました。目だけが異様に大きく、その目がとても悲しげに、責めるようにこちらを見ているので、わたしにも彼女の内心の思いが読みとれました。「ああ、アンネ、どうしてあたしを見捨てたの？ 助けて、どうか助けて、この地獄から救い出して！」

でもわたしには、どうしてあげることもできません。ただ、見まもるだけです、みんなが苦しみ、死んでゆくのを。そしてただ、なすすべもなくすわって、彼女をわたしたちの手に返してと神様にお祈りするだけ。私はハンネリだけを、ほかのだれでもないハンネリだけを見ました。そしてやっとわかりました。以前は彼女を誤解していたし、あんまり幼すぎて、彼女の悩みが理解できなかったんだ、って。彼女には新しいお友達ができて、そのお友達と親しくなりましたが、どうやら彼女にはわたしが、そのお友達との仲を裂こうとしているみたいに思えたようなのです。気の毒に、いったいどんな気持ちでいたことでしょうか！ そういう気持ちはわたしにもとてもよくわかります。ときにはまるで閃光のように、彼女の一面がちらっと見えることもありましたけど、わたしは身勝手にも、すぐまた自分自身の喜びとか、悩み事などに心を奪われてしまったものでした。

思えばずいぶんひどい態度をとったものですが、その彼女がいまこうして私を見ている。ああ、なんと頼りなげな、青ざめた顔、訴えるようなまなざしでしょう。なんとかしてわたしの力で助けてあげられたら！ おお神様、なぜ私だけが望むものをなにもかも手に入れ、ハンネリはあんなに恐ろしい運命に陥らなくちゃならないのでしょうか。けっして彼女よりもりっぱな人間なんかじゃないのに。彼女だって正しくあろうと努めていたのに。なぜわたしは選ばれて生きのび、彼女は死ななくてはならないのでしょうか。わたしたちのあいだに、どんな違いがあるのでしょうか。どうしていまは、お互いの立場がこんなにかげはなれてしまったのでしょうか。

正直に言うと、ここ何か月ものあいだ、いえ、ほとんど1年近くも、ハンネリのごことはぜんぜん思いだしもしませんでした。けっして忘れてしまったわけじゃないんですけど、こうしてみじめに打ちひしがれた彼女の姿を眼前に見るまでには、一度もこんなふうに彼女のことを考えてみたことはなかったのです。

おおハンネリ、もしも戦争のすむまで生きのびられたら、どうかわたしのところへもどってきてください。そのときこそ、わたしはあなたを迎え入れて、いくぶんかでも、あなたにたいして犯した過ちの償いができたら、そう思います。

とはいえ、私が彼女を助けてあげられるころには、彼女もいまほどわたしの助けを必要としなくなっているかもしれない。はたして彼女は、いまわたしのことを思い出すことがあるのでしょうか。もしあるとしたら、どんな気持ちでいるのでしょうか。

どうか神様、ハンネリをお護りください。せめて彼女がひとりぼっちにならないようにしてあげてください。そしてもしもわたしにかわって、どんなにわたしが彼女のことを思っているか、どんなに彼女の身を気づかっているかを伝えてくださったら、きっと彼女も、より以上の勇気を見いだすことでしょうか。

いつまでこのことをくよくよ考えていてもしかたありません。考えても、どうにもならない

母に連れられて幼稚園へ行きました。わたしはまだオランダ語が話せなかったので、母はどうなることやらとはらはらしました。ところが、園にはいってゆくと、入り口のすぐそばにアンネがいて、鐘をならしてくれました。彼女がこちらへ向きなおるなり、わたしはまっしぐらにその腕のなかにとびこんでゆき、そこで母は安心して家へ帰ることができました。それまでの引っ込み思案はどこへやら、その瞬間にわたしは、もう母のことを忘れてさえいたんです！

同じドイツ語を話す Anne と Hanneli は急激に仲良くなっていった。Anne は Hanneli と、また同じくモンテッソーリスクールに通っていたユダヤ人少女サンネ・レーデルマンと仲が良かった。彼女たちはどこへ行くにもいつも一緒に、冗談を言っては大笑いしていた。

Anne たちが隠れ家での潜伏生活に入ったのは、1942年7月6日の早朝のことであった。その日の午後のことか、Hanneli は母親の使いで Frank 家を訪ねた。しかし、呼び鈴を鳴らしても誰も出てこなかった。別の住民がドアを開けたので、Hanneli が、秤を借りに来たのだと言うと、相手は、Frank 一家はスイスに行ってしまったのだと答えたという (澤田, 2005)。

Hanneli の母親は、1942年10月に産褥熱で病死した。そして、Hanneli と彼女の家族 (妹、父親、祖父母) は1943年6月にヴェステルボルク中継収容所に連行され、さらに1944年2月15日にはベルゲン＝ベルゼン強制収容所に移された。したがって、Anne が Hanneli の幻視を見た1943年11月27日には、Hanneli は家族と共にヴェステルボルクの中継収容所にいたことになる。

文 献

- Berenbaum, M. (1993) : *The World Must Know : The history of the Holocaust as told in the United States Holocaust Memorial Museum*. Boston: Little, Brown & Co. 芝 健介 (訳) (1996) : ホロコースト全史. 創元社.
- Frank, O. H. & Pressler, M. (Eds.) (1991) : *Anne Frank Diary*. Only authorized and completed version. Basel : Anne Frank-Founds. 深町眞理子 (訳) (1994) : アンネの日記完全版. 文藝春秋.
- Frank, O. H. & Pressler, M. (Eds.) (2001) : *Anne Frank Diary*. Only authorized and completed version. Reprinted with previously unpublished material. Basel : Anne Frank-Founds. 深町眞理子 (訳) (2003) : アンネの日記 増補新訂版. 文藝春秋.
- Frankl, V. E. (1947) : *Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*. Wien : Verlag für Jugend und Volk. 霜山徳爾 (訳) (1961) : 夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録. みすず書房.
- Frankl, V. E. (1995) : *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerunge*. 2., durchges. Auflage. München : Quintessenz MMV Medizin Verlag. 山田邦男 (訳) (1998) : フランクル回想録—20世紀を生きて. 春秋社.
- Gies, M. & Gold, A. L. (1988) : *Anne Frank Remembered : The story of the woman who hid the Frank family*. New York : Simon and Schuster. 深町眞理子 (訳) (1994) : 思い出のアンネ・フランク. 文藝春秋.
- 石田友雄 (1980) : ユダヤ教史. 山川出版.
- Lee, C. A. (1999) : *Roses from the Earth : The biography of Anne Frank*. Viking. 深町眞理子 (訳) (2002) : アンネ・フランクの生涯. DHC.

- Müller, M. (1998) : *Das Mädchen Anne Frank*. Claassen Verlag. 畔上 司 (訳) (1999) アンネの伝記. 文藝春秋.
- 名島潤慈 (1999a) : 夢分析における臨床的介入技法に関する研究. 風間書房.
- 名島潤慈 (1999b) : 善導の夢—三夜の夢における数字の意味についての検討. 心理臨床学研究, 17 (2) 113-123.
- 名島潤慈 (2003) : 臨床場面における夢の利用—能動的夢分析. 誠信書房.
- 名島潤慈 (2004) : 『更級日記』における阿弥陀仏来迎の夢の検討. 山口大学心理臨床研究, 4, 3-14.
- 名島潤慈 (2005) : 源信の夢. 山口大学心理臨床研究, 5, 9-19.
- Newman, J. S. (1963) : *In the Hell of Auschwitz : The wartime memories of J. S. Newman*. New York : Exposition Press. 千頭宣子 (訳) (1993) : アウシュヴィッツの地獄に生きて. 朝日新聞社.
- 大澤武男 (1995) : ヒトラーとユダヤ人. 講談社現代新書.
- Random House Academic Resources (2004) : *The Diary of a Young Girl by Anne Frank*. Teacher's guide. <http://www.randomhouse.com/acmart/catalog/display.pperl?isbn=9780385480338&view=lg>
- 澤田愛子 (2005) : 夜の記憶—日本人が聴いたホロコースト生還者の証言. 創元社.
- 霜山徳爾 (1961) : 解説. 霜山徳爾 (訳) : 夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録. みすず書房, 7-73.
- van Maarsen, J. (1990) : *Anne en Jopie : Leven met Anne Frank*. Amsterdam : Balans. 2. druk edition. 深町真理子 (訳) (1994) : アンネとヨーピー—わが友アンネと思春期をともに生きて. 文藝春秋.
- Wiesel, E. (1958) : *La Nuit*. Paris : Les Editions de Minuit. 村上光彦 (訳) (1967) : 夜. みすず書房.
- Wikipedia (2005) : *Anne Frank*. http://en.wikipedia.org/wiki/Anne_Frank